

組織的な若手研究者等海外派遣  
プログラム (短期派遣 EUROPA) 国際連携による非英語圏ヨーロッパ諸地域に  
関する若手人文学研究者海外派遣プログラム 派遣報告書

氏名：

川井 絵里佳 (かわい えりか)

東京外国語大学大学院博士前期課程 言語・文化専攻 文学文化科学研究コース2年

関口時正ゼミ所属 (ポーランド文化研究)

派遣先：

ポーランド

クラクフ Kraków、バラヌフ・サンドミェルスキ Baranów Sandomierski、サンドミエシュ Sandomierz、カジミエシュ・ドルニ Kazimierz Dolny

ベラルーシ (主な研究対象地)

フロドナ Гродна、ボハティロヴィチ Багатырэвічы、ノヴォグルデク Навагрудак、ミル Mip、ザオシェ Завоссе、イシコウジ Ішкалдзь、ニアシフィシ Нясвіж、ミンスク Мінск、スウォニム Слонім、ブレスト Брэст

派遣期間：

2012年8月23日～2012年9月1日

派遣の概要：

ポーランド、クラクフに本部を置く国際文化センター (International Culture Centre in Kraków) 及び指導教官である関口時正教授、篠原琢教授主催の研究集会「国際移動セミナー《クラクフからミンスクへ》ヨーロッパ東部境界地域の共有遺産研究——第3回」(開催期間 2012年8月23日～2012年9月1日)に参加した。今回のセミナーは2008年のウクライナ西部地域、2010年のリトアニアに続く3度目の国際移動セミナーであり、ベラルーシ西部の主要都市(フロドナ、ミンスク、フロドナ)のみならず、個人での訪問は難しい小都市の教会や遺跡をバスで訪れた。このセミナーでは、三国分割(1795年)以降ポーランド領から離脱した「Kresy」地方(日本語では「失われた東方領土」とも訳される)の調査を行っている。

報告者はワルシャワ大学歴史学部(ポーランド)留学中に、2度ベラルーシを訪れており、今回が3度目の滞在となる。留学中はワルシャワ大学のベラルーシ学科(Białorutenistyka)でベラルーシ現代史とポーランド・ベラルーシの境界地域の文化について学び、またベラルーシからの留学生との交流を通じて現代ベラルーシを取り巻く情勢について知識を深め

ていた。そのため、今回のセミナーは学んだことを再確認し、発信に向けて準備するという意味があった。

このセミナーには、国際文化センターから案内役としてバルバラ・シペル **Barbara Szyper** さん、アガタ・ヴォンソフスカ＝パヴリク **Agata Wąsowska-Pawlik** さんのお二人と、ポーランド史を専門とする研究者、及びハンガリーやロシア史などポーランド以外を専門とする研究者合わせて **21** 人が参加した。大学院生の参加者は報告者一人であったが、日本での研究が進んでいないベラルーシについて、他の研究者の方々に多くの知識を提供することができたと思っている。

### 成果：

ベラルーシは旧ソ連から独立した国々の中でも特にナショナリズムの弱い国と言われている。その証拠に、ベラルーシ語の他にロシア語も公用語として扱われるだけでなく、教育の言語としても広く用いられており、歴史教育も民族の歴史を無視したソ連式の教育が行われている。(一方反体制のエリートたちは意識的にベラルーシ語を使用し普及しようと努めているが、**18** 年間独裁を続けているルカシェンコ大統領による締め付けにより、強い影響力を持ち得てはいない)

今回のセミナーで見学した遺跡・文化遺産は主に **3** 種類に分類されると報告者は考えている。一つ目は豪華で装飾的だが、独自の歴史を持たない建築物である。首都ミンスクそのものがその代表である。ユネスコ世界遺産にも登録されている、ポーランドの大貴族ラジヴィウ家の居住地であったミル城、ニアシフィシ城、両方の城もきれいに修復されているが、どちらも歴史的な建築手法は無視されており、正当な歴史認識のためではなくプロパガンダに利用されているように感じられた。

二つ目は、管理、修復のされていない廃墟である。ポーランド人貴族デュルツキ・ルベツキの館や各地に点在する教会や修道院といった建物が、取り壊される訳でもなく、なすがままの状態で見捨てられているのを見た。

最後に挙げられるのは、ベラルーシ国内に残るポーランド文化の遺跡及び建築物である。セミナーの主催団体がポーランドの機関であるため、ポーランド寄りの歴史認識になりがちではあったが、ポーランド語による文化活動が国境によって隔てられて **70** 年以上経った今も続いているのは事実である。また、ポーランド文化に対し強い抵抗感、反感を他の人々が抱いていなかったことも印象的である。ベラルーシはカトリックとロシア正教、東方正教会が混在しており、**95** パーセントがカトリックでそれに対し自身のアイデンティティを求めるポーランドとは対照的であった。

いずれの遺跡、建築物も、**20** 世紀初頭によりやく民族意識を持ち始めたが、第一次大戦後のポーランド支配、第二次大戦後のソ連時代を経て、**100** 年以上経った今でも、未だ確立できないでいるベラルーシを象徴するような物であった。

#### 今後の課題：

ベラルーシ西部地域はポーランドの物かベラルーシの物か——今回のセミナーでは、ポーランド人ではない報告者が、ポーランド史を研究する際、ポーランド東部地域をどのように扱うべきなのか考えさせられることが多かった。というのも、ポーランドによる直接統治を離れた地域に対してまでポーランド性を求め、ポーランド的歴史認識をなぞることに「外の間人」である報告者が携わる必要があるのだろうかという疑問を感じたためである。ベラルーシという、ポーランドと「似て非なる存在」を見ることにより、ポーランド史に対する多角的なアプローチが出来うるのではないかと強く認識する機会となった。